

平安宮典薬寮・御井跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安宮典藥寮・御井跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、病院建設工事に伴う平安宮跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

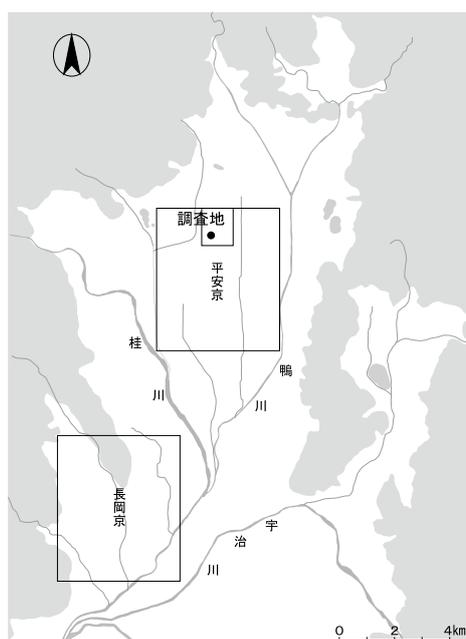
平成26年7月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 平安宮典薬寮・御井跡（文化財保護課番号 13 K 294） |
| 2 調査所在地 | 京都市中京区西ノ京車坂町12、19－1 |
| 3 委 託 者 | 株式会社 竹中工務店 京都支店 支店長 中原 淳 |
| 4 調査期間 | 2014年3月4日～2014年4月24日 |
| 5 調査面積 | 521㎡ |
| 6 調査担当者 | 布川豊治・金島恵一 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」「花園」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 布川豊治 |
| 14 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員および資料業務職員があたった。 |

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	5
(1) 層序と遺構の概要	5
(2) 平安時代以前の遺構	8
(3) 江戸時代の遺構	9
4. 遺 物	11
(1) 遺物の概要	11
(2) 土器類	11
(3) 瓦類	12
(4) その他の遺物	15
5. ま と め	16

図 版 目 次

図版1	遺構	1 調査区全景（東から）
		2 土坑76（北東から）
		3 土坑76土器出土状況（南東から）
図版2	遺物	土器類・瓦類
図版3	遺物	軒瓦

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（北西から）	3
図4	作業風景（西から）	3
図5	調査区西壁断面図（1：100）	5
図6	調査区南壁断面図（1：100）	6
図7	遺構平面図（1：150）	7
図8	火山灰層検出地点断面図（1：50）	8
図9	火山ガラス拡大写真（×100）	8
図10	土坑76実測図（1：40）	8
図11	柱穴43実測図（1：20）	8
図12	東西・南北セクション断面図（1：100）	10
図13	出土土器実測図（1：4）	12
図14	軒瓦拓影・実測図（1：4）	13
図15	記号瓦・緑釉瓦拓影・実測図（1：4）	14
図16	鬼瓦・鴟尾出土部位推定概略図	14
図17	磨製石器実測図（1：4）	15

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	4
表2	遺構概要表	5
表3	遺物概要表	11

平安宮典藥寮・御井跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

調査地は、近年まで関西電力二条変電所があり、その後、駐車場として利用されていた。ここに医療施設の新築が計画され、京都市文化市民局文化芸術推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）によって試掘調査が行われた。その結果、遺構が遺存することが確認されたことから、発掘調査を実施することとなり、文化財保護課の指導の下、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当した。

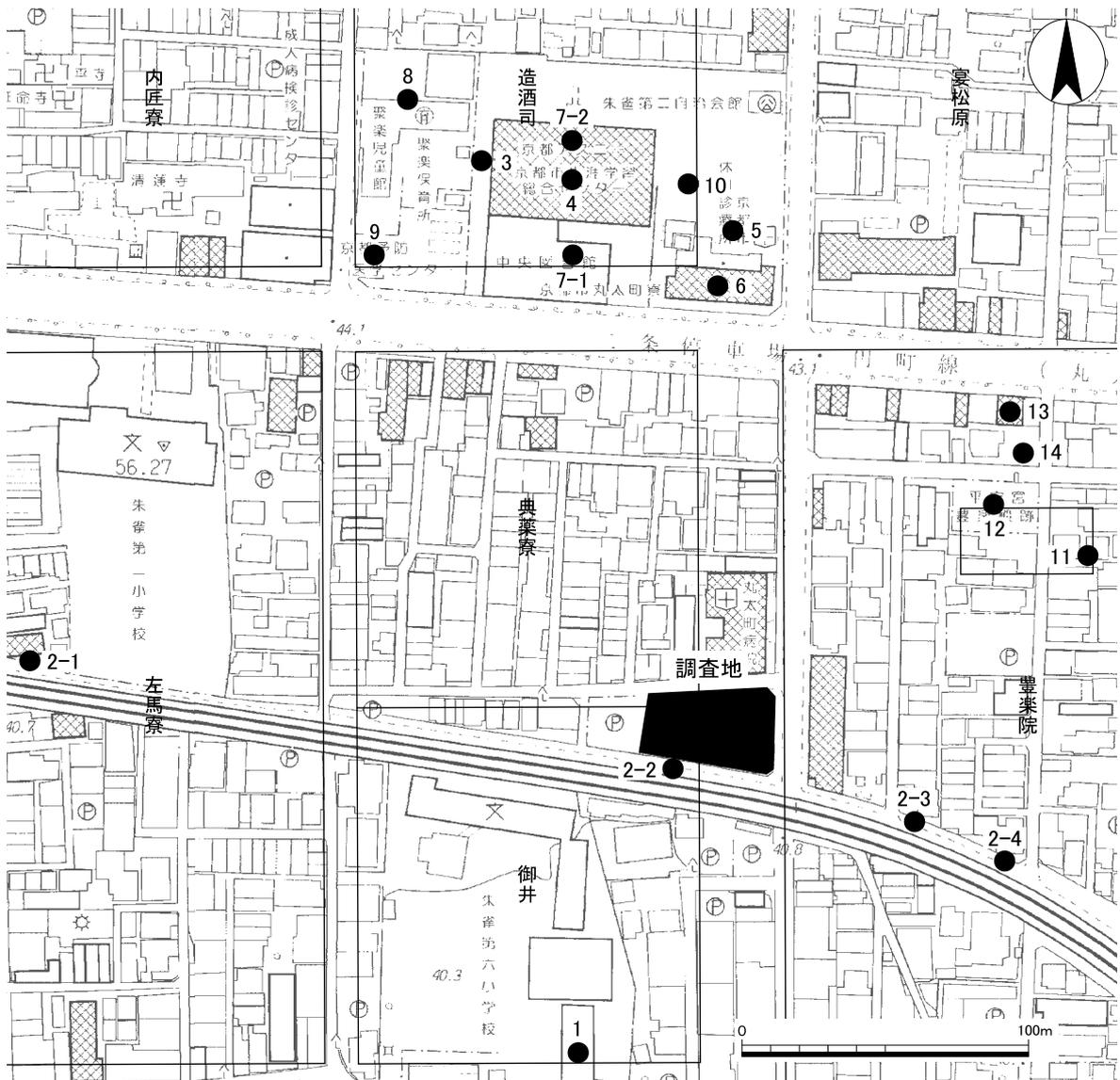


図1 調査位置図 (1:2,500)

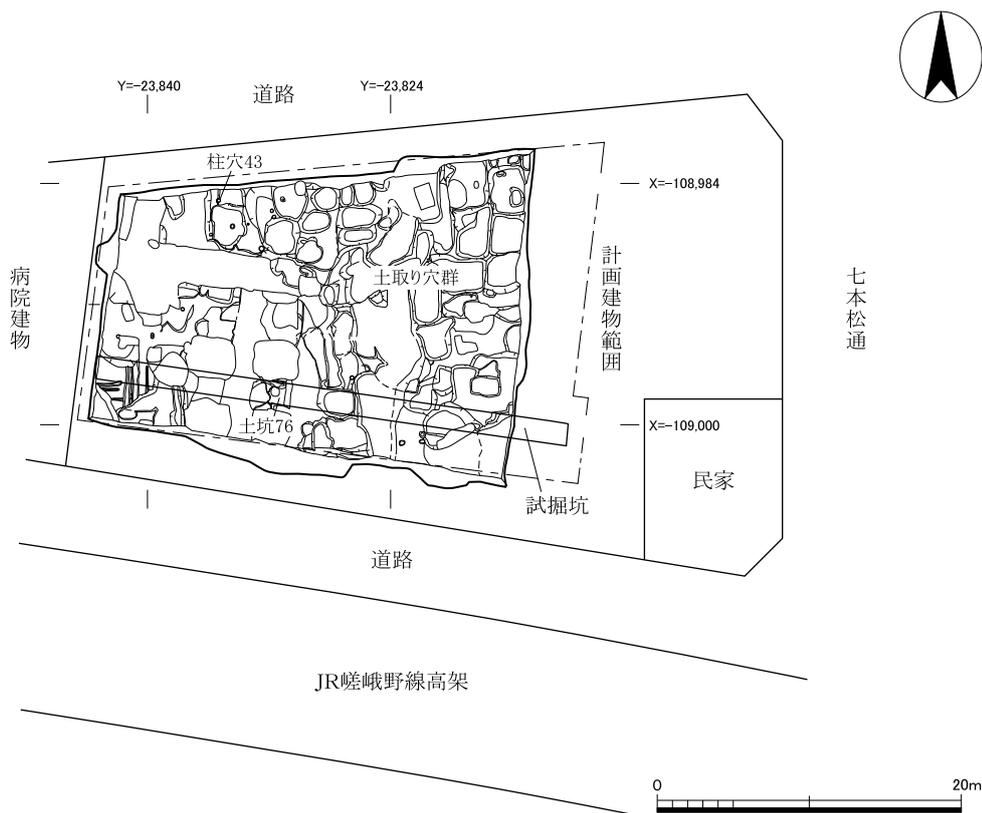


図2 調査区配置図 (1 : 500)

(2) 調査の経過

調査に先立ち、施工業者により既存コンクリート基礎の撤去工事が行われた。調査は西から現代盛土(厚さ0.5~1m)を重機で掘削し、遺構面を検出した。調査区の東半は、コンクリート基礎の撤去と並行して重機掘削を行った。調査区の西半は地山層の標高が高く、その上面で、南西部では耕作溝や近世層など、北西部では土坑などを検出した。調査区の東半は、江戸時代前期の多くの土坑を検出した。また、それより時期の古い遺構は、破壊を免れたものを数基検出した。

検出した遺構は人力で掘削した。調査区の西半は遺構ごとに、東半は上層・中層・下層と3層に分けて順次掘り下げを進め、随時、写真撮影、図面作成などによる記録を作成した。遺構完掘後、北東部一帯で地山層中に火山灰層を確認したため、調査区の東壁の一部を断ち割り、土のサンプル採集・断面図作成などを行った。掘削中の残土は、重機掘削中は場外へ搬出、人力掘削中は場内に仮置きした。調査区は安全面などの制約があったため、文化財保護課の許可を得て、最終的に東西約28m、西辺約15mと東辺約22.8mの台形状で、面積は約521㎡となった。また、調査中は適宜、文化財保護課の臨検を受けた。

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

調査地は京都盆地の北部、船岡山から続く緩い傾斜地の南端にあたる安定した地盤の上に位置する¹⁾。当地周辺では、古墳時代から人の生活痕跡が確認されており、古墳時代の集落である聚楽遺跡、古墳時代から奈良時代の集落である鳳瑞遺跡がある。その後、平安京遷都に伴い、平安宮が造営される。調査地は平安宮の典薬寮跡と御井跡にまたがり、調査区の東半は宮内道路に推定されている²⁾。典薬寮は医学教育や医療を掌り、薬園の管理を行った宮内省所管の役所である。御井はその南に設置された天皇に供する水を汲む井戸である。元日に典薬寮によって行われる供御薬の際の屠蘇を浸したり、造酒司における酒の醸造にも用いられた。平安宮は度々の火災などに遭い、摂関期以降には里内裏が一般的となって荒廃が進み、鎌倉時代に入ると漸次、荒れ野となる。しかし、桃山時代に入ると聚楽第が築かれ、江戸時代には調査地を含む一帯は、二条城を取りまく京都所司代や奉行所、屋敷地などになった。

(2) 既往の調査（図1、表1）

調査地周辺では、これまでに発掘調査・試掘調査・立会調査が実施されている。

御井跡にあたる調査1（図1-1）では、北側の御井関連遺構は検出しなかったが、道路にあたる南側では平安時代後期から鎌倉時代の瓦敷き遺構を検出した。

調査2（図1-2-1～2-4）はJR嵯峨野線（山陰線）複線高架化に伴う調査で、左馬寮・御井・豊楽院跡にあたる。左馬寮跡（図1-2-1）では平安時代と考えられる土坑や土層を検出した。御井跡（図1-2-2）では平安時代の土坑や土取り穴などを検出した。豊楽院跡（図1-2-3）では江戸時代の土取り穴を、同東側（図1-2-4）でも江戸時代の土取り穴を検出した。

造酒司跡では、現在までに8次の調査が実施され（図1-3～10）、主に南半部の様相が明らかになり、平安時代の掘立柱建物・土坑などを検出した。

豊楽院の調査（図1-11～14）は、これまでに多く実施されているが、未だ豊楽院の建物配置



図3 調査前全景（北西から）



図4 作業風景（西から）

表1 周辺調査一覧表

調査番号	遺跡名	調査年	文 献
1	御井跡	1979年	「平安宮御井跡」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
2	左馬寮跡・御井跡・豊楽院跡	2001年	辻 裕司『平安宮左馬寮・御井・豊楽院跡』京都市埋蔵文化財研究所調査概報2001-5 2002年
3	造酒司跡	1974年	梶川敏夫「造酒司跡推定地発掘調査概要」『平安宮跡 京都市埋蔵文化財年次報告1974-I』京都市文化観光局文化財保護課 1975年
4	造酒司跡	1977年	本 弥八郎「平安宮造酒司跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1977-I』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1977年
5	造酒司跡	1977年	本 弥八郎「平安宮造酒司跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1977-I』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1977年
6	造酒司跡	1977年	「平安宮造酒司跡1」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
7	造酒司跡	1978年	「平安宮造酒司跡2」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
8	造酒司跡	1978年	「平安宮造酒司跡」『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
9	造酒司跡	1979年	「平安宮造酒司跡」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
10	造酒司跡	2012年	南 孝雄『平安宮造酒司跡・鳳瑞遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2012年
11	豊楽院跡	1981年	吉崎 伸「平安宮豊楽院跡」『平安京跡発掘調査概報』昭和55年度 京都市埋蔵文化財調査センター 1981年
12	豊楽院跡	1988年	鈴木久男「平安宮豊楽院(1)」『平安京跡発掘調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年
13	豊楽院跡	1988年	鈴木久男・網 伸也「平安宮豊楽院(2)」『平安京跡発掘調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年
14	豊楽院跡	2007年	西森正晃・内田好昭「平安宮豊楽殿跡・鳳瑞遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成19年度 京都市文化市民局 2008年

や規模には不明な点が多い。ただし正殿である豊楽殿については、ほぼ建物規模が判明しており、また、その北廊と北側にあった清暑堂の遺構も確認されている。

註

- 1) 横山卓雄「京都盆地の自然環境」『平安京提要』（財）古代学協会 角川書店 1994年
- 2) 京都市遺跡地図台帳【第8版】京都市文化市民局 2007年

3. 遺 構

(1) 層序と遺構の概要

地表面の標高は、41.25～41.75mで南東に高く北西に低くなっている。調査区南西部の層序（図5・6）は、地表面より現代盛土が厚さ0.6～0.8m、耕作土（近代）が約0.1～0.2m、灰黄褐色から褐色砂泥の整地層（近世）が厚さ0.1～0.2mとなる。この下面を遺構面とし、地山層とそれを掘り込む遺構である土取り穴などを検出した。東半（図6）では、地表面より現代盛土が厚さ1.0～1.3m、耕作土（近代）が約0.1～0.2m、その下面を遺構面とし、土取り穴などを検出した。地山層は褐色砂泥と黄褐色シルト、黄褐色砂礫を主体とし、東半では土取りにより地山層は削平され、砂礫層は東から西へ高くなる。

検出した遺構は調査区の西半が少なく、東半に多い。古墳時代の土坑1基、平安時代の柱穴1基、江戸時代前期の多くの土坑（土取り穴）などである。

また、調査区の北東部において、地山層中に始良Tn(AT)火山灰層を確認した¹⁾（図7～9）。この層は地表面下約2m前後、標高39.3～39.5mに堆積する。

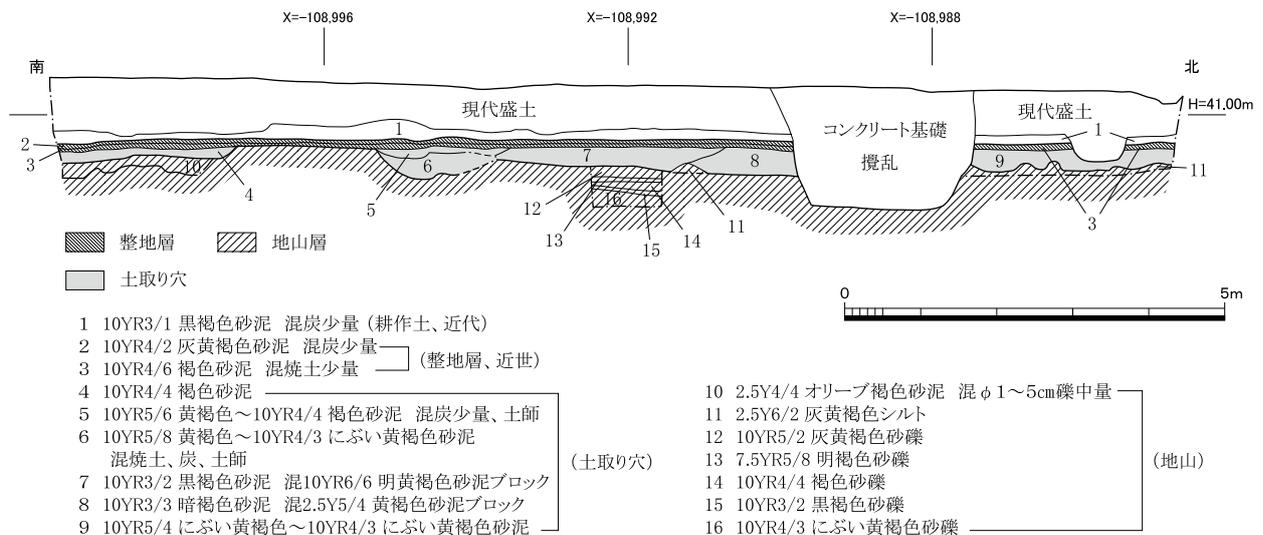
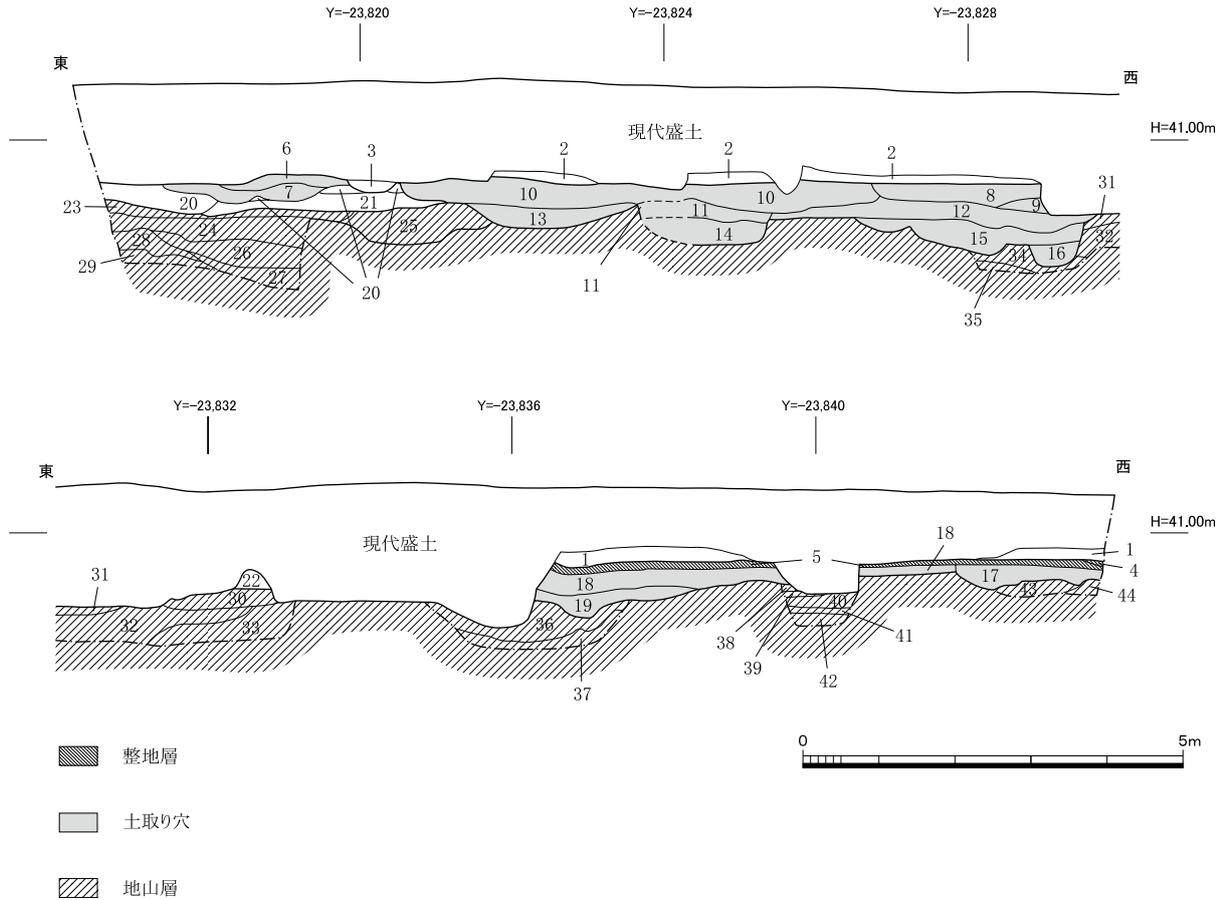


図5 調査区西壁断面図（1：100）

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	土坑76	1基
平安時代	柱穴43	1基
江戸時代	土取り穴、整地層	土取り穴は多数



- | | | | |
|--------------------------------------|----------|---------------------------------------|---------|
| 1 10YR3/1 黒褐色砂泥 混炭少量 | (耕作土、近代) | 20 7.5YR2/1 黒色砂泥 均質 | (古墳時代か) |
| 2 7.5YR4/2 灰褐色砂泥 混小礫 | | 21 7.5YR3/3 暗褐色砂泥 混シルト | |
| 3 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 混砂礫中量 | | 22 7.5YR2/1 黒色～3/1 黒褐色砂泥 均質 | |
| 4 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 混炭少量 | (整地層、近世) | 23 10YR3/3 暗褐色砂泥～7.5YR4/3 褐色砂泥 | |
| 5 10YR4/6 褐色砂泥 混焼土少量 | | 24 10YR7/8 黄褐色シルト 混 7.5YR6/8 橙色シルト少量 | |
| 6 10YR3/2 黒褐色砂泥 混小礫 | (土取り穴) | 25 7.5YR4/2 灰褐色砂泥 混φ～4cm礫中量 | |
| 7 10YR2/3 黒褐色砂泥 混φ～5cm礫中量、瓦少量 | | 26 7.5YR4/6 褐色シルト 混 7.5YR5/6 明褐色シルト中量 | |
| 8 10YR2/3 黒褐色～7.5YR2/1 黒色砂泥 | 上層 | 27 10YR5/6 黄褐色シルト | |
| 混 10YR6/3 にぶい黄橙色砂泥小ブロック少量 | (土取り穴) | 28 10YR6/6 明黄褐色シルト 混 10YR5/6 黄褐色砂礫中量 | |
| 9 10YR2/3 黒褐色～7.5YR3/1 黒色砂泥 | | 29 10YR3/3 暗褐色砂礫 | |
| 混 7.5YR5/6 明褐色細砂小ブロック少量 | | 30 10YR6/2 灰黄褐色シルト混 10YR6/6 明黄褐色細砂 | |
| 10 10YR3/2 黒褐色～10YR2/1 黒色砂泥 | 中層 | 31 10YR7/1 灰白色～10YR5/8 黄褐色シルト | |
| 混 10YR6/3 にぶい黄橙色砂泥小ブロック少量 | (土取り穴) | 32 10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂 混礫 | |
| 11 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 | | 33 7.5YR5/6 明褐色粗砂 | |
| 混 10YR4/6 褐色砂泥小ブロック少量 | | 34 5Y5/1 灰色粘土 混 5Y6/3 オリーブ黄色粘土少量 | (地山) |
| 12 10YR3/1 黒褐色砂泥 | | 35 5Y4/1 灰色砂礫 | |
| 混 10YR5/6 黄褐色泥砂・10YR4/1 褐灰色細砂 | | 36 10YR5/6 黄褐色シルト (粘質) | |
| 13 7.5YR2/2 黒褐色砂泥 混 10YR4/2 灰黄褐色 | 下層 | 混 10YR6/2 灰黄褐色細砂 (礫混じり) | |
| ～10YR6/3 にぶい黄橙色砂泥小ブロック少量 | (土取り穴) | 37 10YR6/2 灰黄褐色粗砂 混小礫 | |
| 14 10YR2/2 黒褐色砂泥 (砂混じり) 混 10YR4/6 褐色 | | 38 7.5YR7/8 黄褐色シルト やや粘質 | |
| ～7.5YR3/4 暗褐色砂泥小ブロック少量 | | 39 7.5YR7/1 明褐色灰色砂礫 | |
| 15 10YR2/2～3/1 黒褐色砂泥 混 7.5YR3/1 黒褐色 | | 40 10YR5/3 にぶい黄褐色砂礫 | |
| 砂泥・10YR5/3 にぶい黄褐色粘土小ブロック少量 | | 41 10YR2/3 黒褐色砂礫 | |
| 16 2.5Y2/1 黒色粘土 混 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘土 | (土取り穴) | 42 10YR4/4 褐色砂礫 | |
| 中量 | | 43 10YR5/4 にぶい黄褐色～5/6 黄褐色砂泥 | |
| 17 10YR4/4 褐色砂泥 | | 混～φ5cm礫少量 | |
| 18 10YR3/2 黒褐色砂泥 混 7.5YR2/1 黒色砂泥 | | 44 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂礫 混φ1～5cm礫中量 | |
| ・10YR6/3 にぶい黄褐色粘土小ブロック少量 | | | |
| 19 10YR3/2 黒褐色砂泥 混 10YR5/4 にぶい黄褐色 | | | |
| 粘土・7.5YR2/1 黒色砂泥小ブロック | | | |

図6 調査区南壁断面図 (1:100)

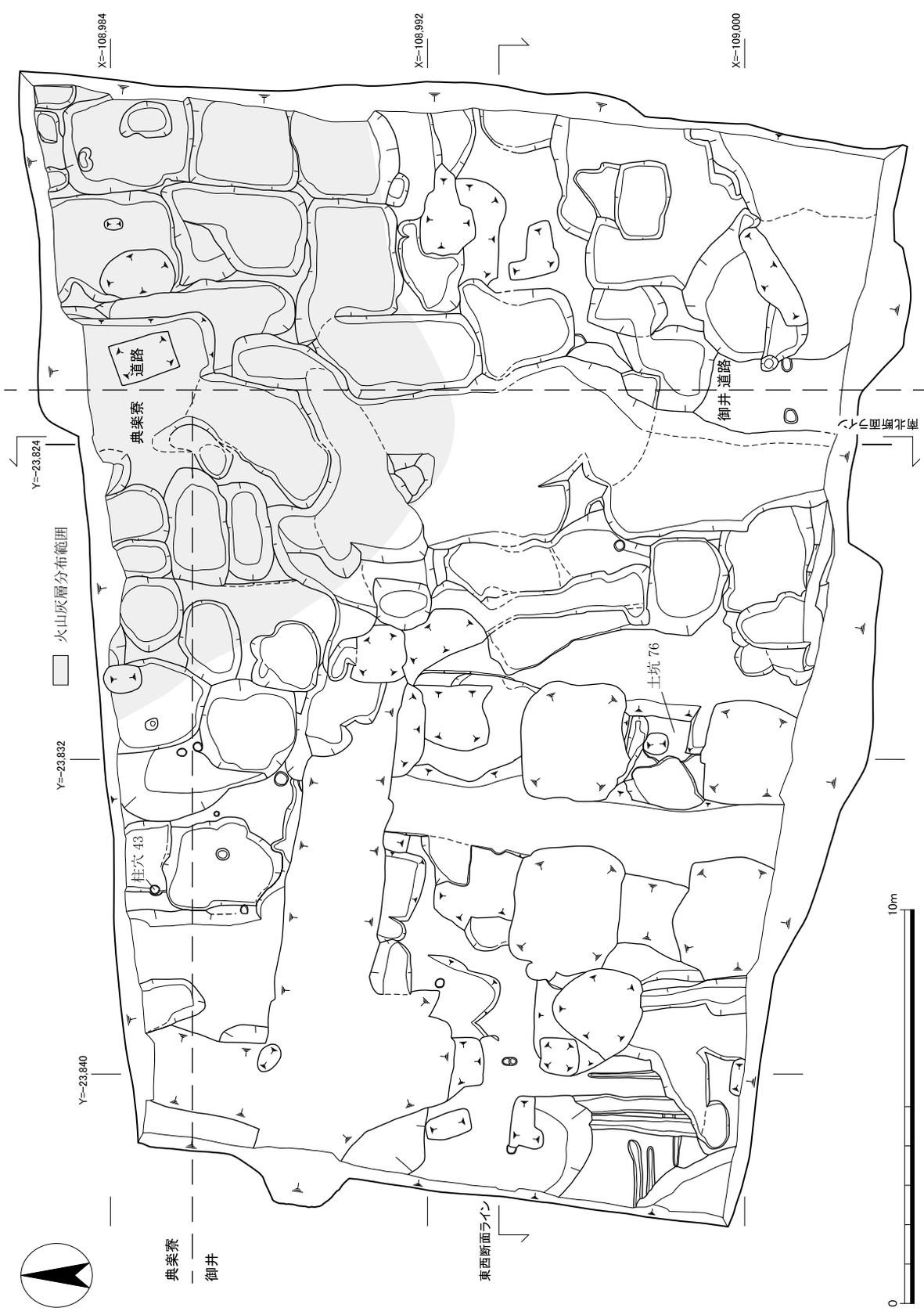


図7 遺構平面図 (1 : 150)

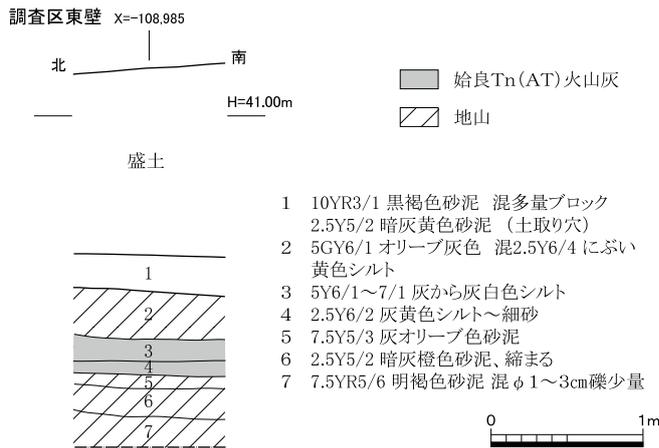


図8 火山灰層検出地点断面図 (1:50)

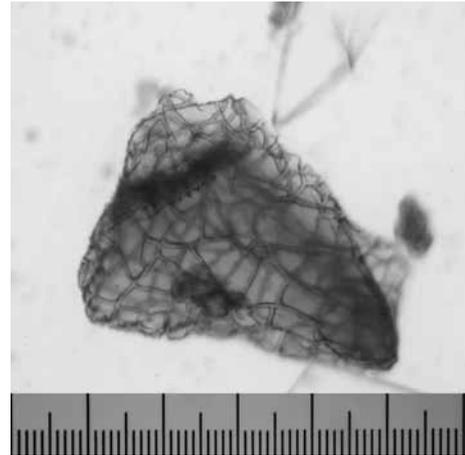


図9 火山ガラス拡大写真 (×100)

(2) 平安時代以前の遺構

古墳時代の土坑1基と平安時代の柱穴1基を検出した。

土坑76 (図10、図版1) 調査区の中央部南側で検出した土坑である。平面形は楕円形であり、規模は、長径約2.3m、短径約2.0m、深さ約0.8mを測る。埋土は黒褐色から黒色の締まった砂泥である。底部中央から古墳時代初頭の土器が出土した。土器は灰色シルトの上に据わる。また、調査区の南東部において土坑76埋土に類似する黒色から黒褐色砂泥層を検出した。遺物は出土しな

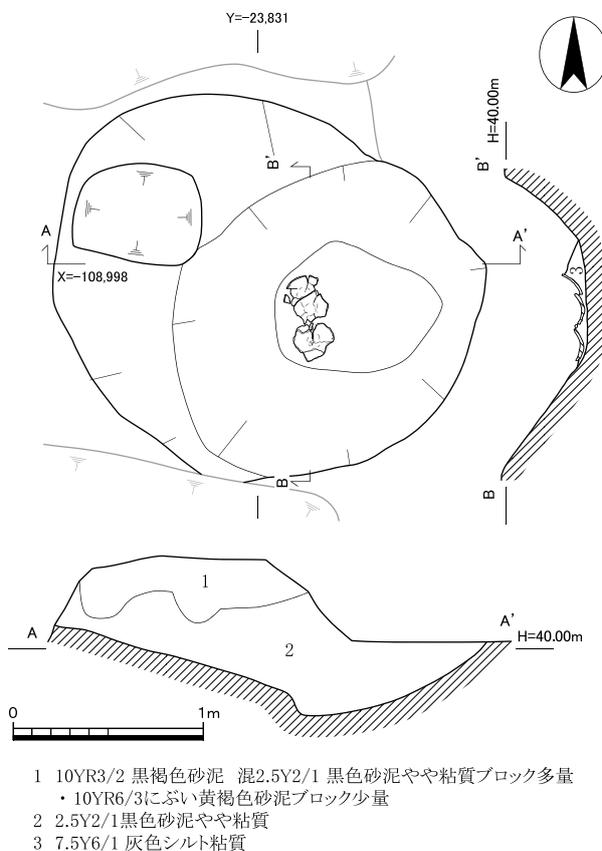


図10 土坑76実測図 (1:40)

かったが古墳時代の土層と考えている。調査区の外の東側に広がり、遺構が良好に遺存する可能性がある。

柱穴43 (図11) 調査区の北西部で検出した柱穴である。上部東半は土取りによって壊されており、掘形は半円形であ

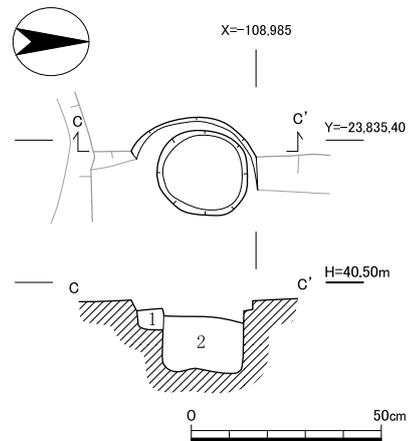


図11 柱穴43実測図 (1:20)

る。柱痕跡の部分のみ深く残存し、円形である。規模は、掘形が南北約0.3m、東西約0.1m、柱痕跡は径約0.25m、深さ約0.2mを測る。埋土は灰黄褐色から黒褐色砂泥で締まっている。平安時代の土師器小片の他に須恵器が出土した。

(3) 江戸時代の遺構

土取りのために掘られたと考えられる穴を多く検出した。調査区の西半では検出面で個々の形状を確認できたが、東半は検出面では形状が確認できなかったため、土層観察セクションを東西と南北に設定し、4m×4mの方形単位ごとに上層・中層・下層と3層に分け面的に掘削した。その結果、下層段階で個々の土取り穴の形状が確認できた。

土取り穴群 (図7・12) 調査区のほぼ全域に及んでいるが、西半が少なく、東半に多い。西半は壁土などの用土に適さない地山砂礫層の標高が高く、土取りが行われなかったと考えられる。確認できるものは65基前後あり、平面形は隅丸長方形が多い。規模は、短軸が1.0～3.0m、長軸が1.5～4.0m、面積は1.1～11.2㎡を測る。平均すると1基の規模は、短軸が1.84m、長軸が2.65m、面積は4.80㎡である。深さは、調査区の西半のものは0.3m前後、東半のものは1m前後、底部の標高は西半で40.2m前後、北東部で約39.5mである。埋土は、上層が礫混じりで固く締まる灰黄褐色から黒褐色砂泥、中・下層はやや粘性のある灰褐色から黒褐色砂泥であり、地山由来の黄褐色砂泥ブロックが多く混じる。中層・下層は、土取り穴の埋め戻し埋土である。上層は、土取り過程の最終段階で全体を整地した層と推定できる。下層からは、平安時代の瓦類が大量に、中世の土器類などが一定量、江戸時代前期の遺物が少量出土した。

整地層 (図5・6) 調査区の西壁と南壁の断面で整地層を確認した。西壁においては南から北端まで、南壁では西から東へ約7m認められ、調査区の西壁から西へ約7m、南北約15mの範囲に残存していたと思われる。この層は調査区の東半は削平されたと思われ、調査区のに広く分布していた可能性がある。整地層は地山層と土取り穴群を覆い、土取りより後に整地された層である。江戸時代前期の遺物が出土した。

註

- 1) 火山灰の分析と写真撮影は当研究所の竜子正彦が行った。また調査地から北へ約150mの造酒司跡8次調査(図1-3-8)で、同様に始良Tn(AT)火山灰層を確認しており、この辺り一帯に同火山灰の堆積が広がっている可能性がある。

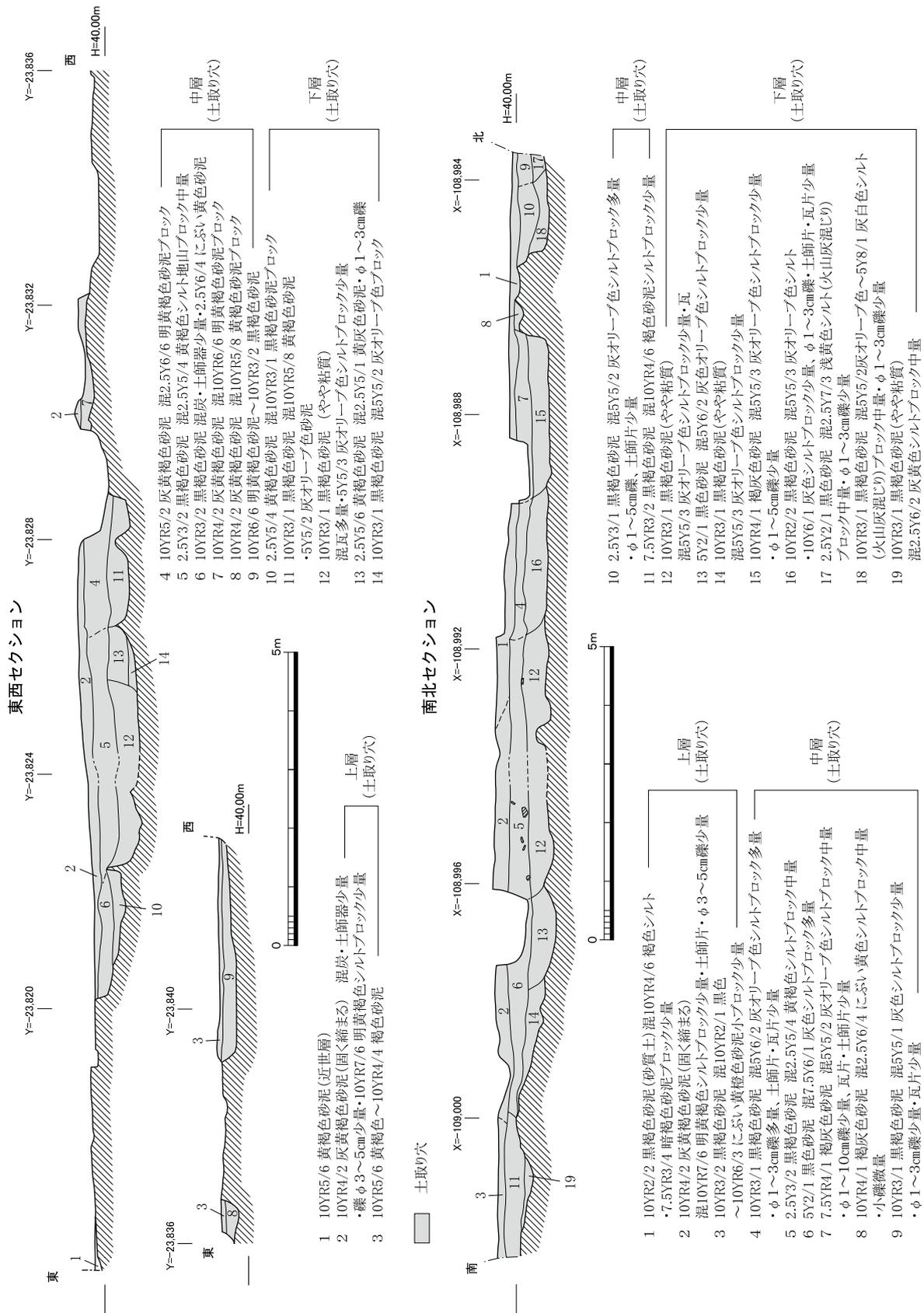


図12 東西・南北セクション断面図 (1:100)

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱で54箱出土した。整理作業を経て箱数は、9箱増え、瓦類が56箱、土器類が5箱、石製品が1箱、木製品が1箱である。時期的に多いものは平安時代の瓦、次に中世の土器類、江戸時代の土器類となる。他に古墳時代の土器、凝灰岩の破片、石器、木製品などが少数出土している。

なお、遺物の時期については、土器類は「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」¹⁾に、瓦類は『平安京古瓦図録』²⁾(以下「古瓦図録」という。)と「瓦と瓦窯の変遷」³⁾(『平安京提要』)に準拠した。

(2) 土器類 (図13、図版2)

土器類は大半が小片のため図示できるものは少数に留まる。

1・2は土坑76から出土した古式土師器(庄内式併行期の土器)甕である。1は口径16.3cm、残存高5.2cmの甕口縁部であり、口縁部は屈曲外反し、端部を丸くおさめる。2は残存高18.2cmの甕体部であり、外面はハケ目を施し、下半部には煤と思われる黒色付着物がある。内面はケズリを施す。時期は古墳時代初頭である。

3～9は土取り穴から出土した土器である。3～7は土師器皿であり、3は体部が肥厚し、口縁部はわずかに外反し、端部はつまみ上げる。4・5は口縁部がわずかに外反してつまむ。6は体部が肥厚し、口縁部はわずかに外反し、端部はつまみ上げる。7は口径9.1cm、器高1.6cmであり、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反し、端部はつまみ上げる。8は鉄釉天目茶碗である。推定口径12.0cm、残存高4.9cmであり、体部はきつく立ち上がり、口縁部は外反し、つまみ上

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代 ～古墳時代	古式土師器、須恵器、石器		古式土師器2点、磨製石器1点		
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、軒瓦、瓦類、石製品		軒丸瓦4点、軒平瓦11点、鬼瓦1点、鴟尾2点、平瓦3点、緑釉丸瓦1点		
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、瓦類				
桃山時代 ～江戸時代	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付磁器、磁器、輸入磁器、瓦類		土師器5点、施釉陶器1点、焼締陶器1点		
合計		63箱	32点(5箱)	0箱	58箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より9箱多くなっている。

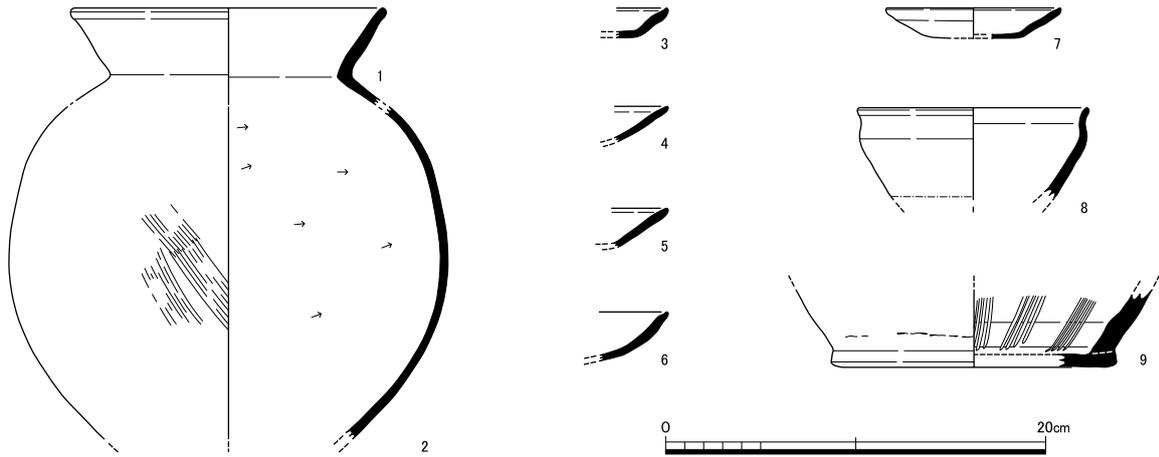


図13 出土土器実測図（1：4）

げる。9は信楽産播鉢である。底部径13.7cm、残存高4.1cmであり、内面には間隔を置き4条の播り目がある。胎土には長石粒が目立つ。出土層は上層が4、中層が8・9、下層が3・5～7である。3～9の時期は、京都X期中段階～XI期新段階に収まり、年代は桃山時代から江戸時代前期に比定できる。

（3）瓦類

瓦類は大半が平瓦・丸瓦である。ほかに軒丸瓦が9点、軒平瓦が22点、鬼瓦・鴟尾が3点、その他に文字瓦が1点、緑釉瓦が5点など12点出土した。それらのうち比較的良好なものを図示した。

軒瓦（図14、図版3） 軒瓦は全て土取り穴から出土した。10は単弁八葉蓮華文軒瓦である。中房には蓮子を1+6を配する。小型の花弁と幅広の間弁を交互に配し、外区は界線・珠文帯・圏線となる。平城宮6151-A式である。11は単弁（十八）葉蓮華文軒丸瓦である。中房には蓮子を1+8を配する。花弁は平坦で、外区は界線・珠文帯・外縁となる。古瓦図録42と同範か。平安時代前期。12は複弁蓮華文軒瓦である。中房には蓮子、花弁は盛り上がり、撥形の弁間文がある。外区は界線・珠文帯・外縁となる。範の文様の一部は浅く磨滅している。「一本造り」である。平安時代中期。13は複弁蓮華文軒瓦である。弁の輪郭線と間弁で界線をつくり、珠文帯・外縁となる。小片であるが、平安時代中期であろう。14は均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは対向C字形で下部が連結し、唐草は3反転する。平瓦部凹面は布目、同凸面は縦位の縄目叩きである。胎土は密で、焼成は硬い。古瓦図録327・328と同文。西賀茂角社西群瓦窯産か。平安時代前期。15は均整唐草文軒平瓦である。中心飾りは2重の対向C字形である。胎土は礫が多く悪い。焼成は軟質。古瓦図録321と同文。平安時代前期。16は中心飾り部分のみであるが、均整唐草文軒平瓦であろう。胎土は礫が多く悪い。焼成は軟質。平安時代前期。17は均整唐草文軒平瓦である。C字形中心飾りとその上から派生する複線風の唐草が3反転する。小野瓦窯産か。平安時代中期。18は均整唐草文軒平瓦である。唐草はやや太めで3反転する。珠文も大き目である。池田瓦窯産か。平安時代中期。19は唐草文軒平瓦である。唐草は太く、珠文は大きい。瓦当面と範が一致せず、上部は文様が切れて

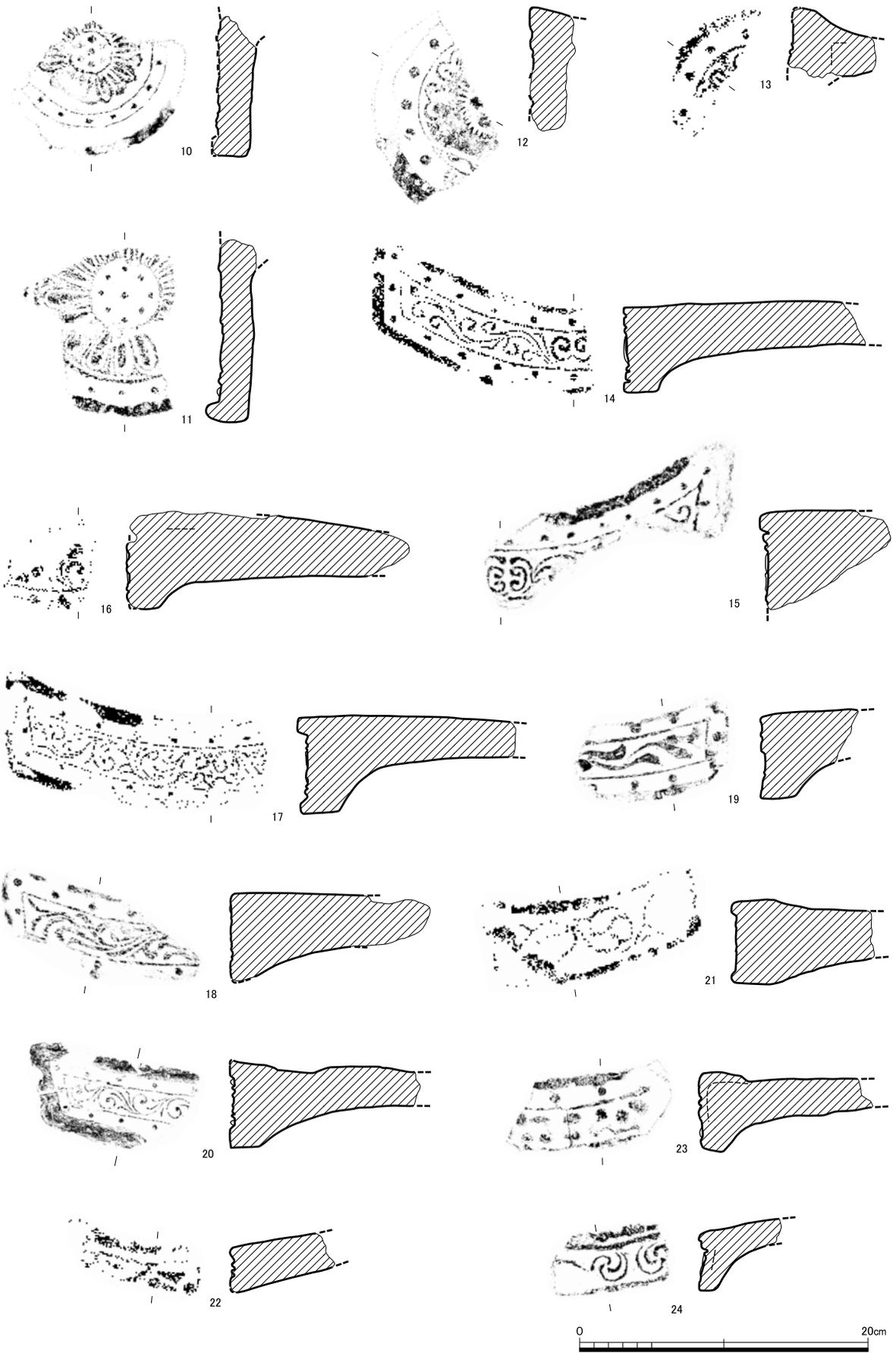


图14 軒瓦拓影·実測図 (1 : 4)

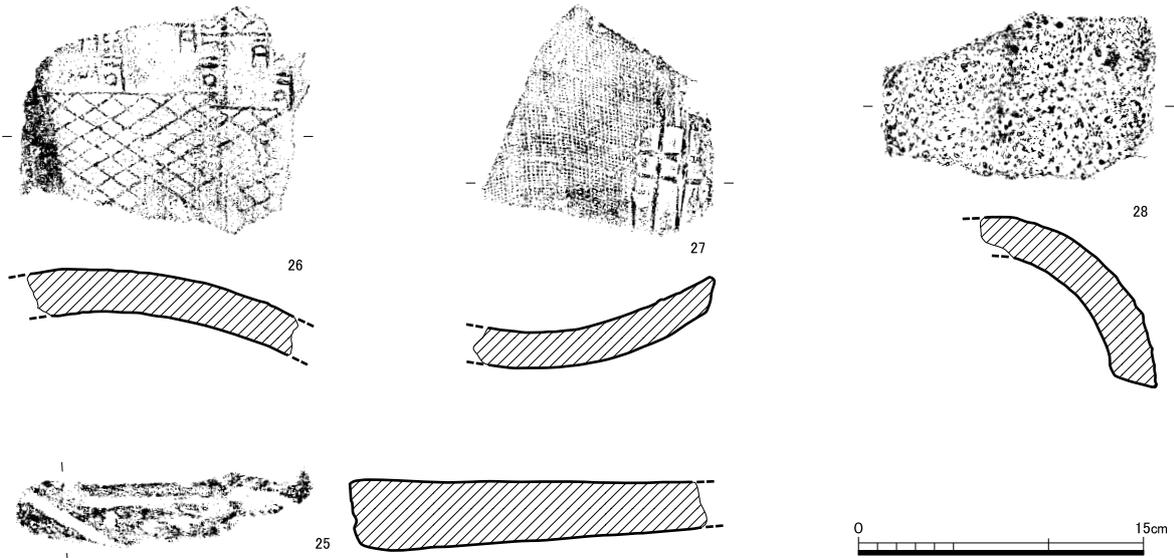
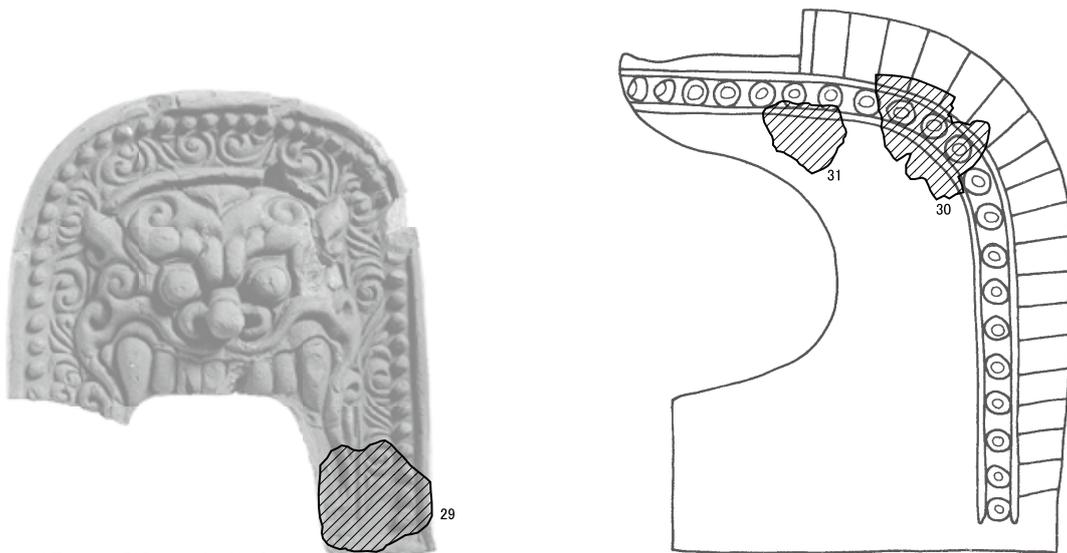


図15 記号瓦・緑釉瓦拓影・実測図（1：4）



参考品 豊樂殿跡出土鬼瓦（重文）

図16 鬼瓦・鴟尾出土部位推定概略図

いる。平瓦部凹面は布目。森ヶ東瓦窯産か。平安時代中期。20は均整唐草文軒平瓦である。4反転する。唐草は小さく、内区は狭い。左端に範キズがある。平瓦部凹面は布目、凸面はナデ消しである。胎土はやや密で、焼成は硬い。平安時代中期か。21は宝相華唐草文軒平瓦である。中心飾りは半載花文、唐草は2転半反転する。平瓦凸部は斜格子叩き、凹面は細かい布目をナデ消す。古瓦図録531と範キズが一致し、キズの磨滅は進んでいるが同範である。讃岐系。平安時代後期。22は唐草文軒平瓦であろう。唐草は太く外区は界線のみである。瓦当面の幅が狭く、文様下半分がない。平安時代後期か。23は唐草文軒平瓦である。唐草は崩れ、縦筋の範キズがあり、左端の文様は潰れている。上外区のみには珠文帯がある。平安時代後期か。24は雁巴文軒平瓦である。三巴と雁行文を配する。平安時代後期。

記号瓦・緑釉瓦（図15、図版2） 25は平瓦である。広端面にヘラで記号の様なものを施す。凹面は細かい布目、凹面は斜め縄叩きである。胎土は密、焼成はやや柔らかい。26は「門司」銘文字瓦である。平瓦凸面の斜格子叩き内にある。文字は正字で、文字の右側に㊦印がある。凹面は布目をハケで削る。古瓦図録766～768と同じ叩き板と思われる。27は平瓦の叩き印である。凹面の布目に縦6.0cm以上、横4.1cmの範囲に大きく格子状に叩く。「井」とも見える。凸面は細かい縦位の縄叩きである。胎土は良質、焼成はやや柔らかい。28は緑釉丸瓦である。玉縁に付く凸面全体に緑釉が施され、表面には2～3mmの隆起する粒が散らばる。凹面は細かい布目、胎土は良質、焼成はやや柔らかい。緑釉の一部に溶解した跡があることから、火災にあったものか。25～28は土取り穴から出土した。

鬼瓦・鴟尾（図16、図版2） 29は鬼瓦の左側端下部である。縦約12cm、横約11cmあり、文様の一部が残る。豊楽院出土のものと同文である。⁴⁾ 30は鴟尾破片である。縦約9cm、横11cm、厚さ約6cmである。凸帯が残る。外面は斜め格子状の叩き、内面は青海波状の叩きである。31は鴟尾破片であろう。⁵⁾ 縦約20cm、横約11cmである。凸帯と珠文が3個残る。29は土取り穴から、30・31は重機掘削中に出土した。

（4）その他の遺物

その他のものは、石製品が石器1点、凝灰岩破片9点など、木製品が6点出土した。小片のため図示したものは石器1点のみである。

石器（図17） 32は、土取り穴から出土した磨製石器である。頭部と尾部は欠損し、幅7cm前後、最大厚さ4.2cm、残存長約5cmである。断面は卵形に近く、長軸の片面は平らに研磨されている。また反対面の両端は幅1.5cm前後に面取りされる。

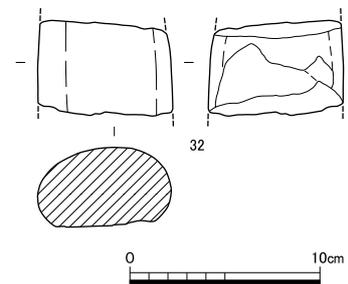


図17 磨製石器実測図（1：4）

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 平安博物館編『平安京古瓦図録』 雄山閣 1977年
- 3) 上原真人・前田義明・上村和直「瓦と瓦窯の変遷」『平安京提要』 角川書店 1994年
- 4) 「平安宮豊楽院（1）」『平安京跡発掘調査概報 昭和63年』 京都市文化観光局 1989年 図版17
- 5) ここでは鴟尾としたが、鬼瓦の破片である可能性がある。

5. まとめ

調査で検出した遺構は3時期のものがあり、土坑76は古墳時代初頭、柱穴43は平安時代、土取り穴群は江戸時代前期である。以下時期ごとに成果をまとめる。

調査地周辺には、古墳時代を中心とする集落跡である鳳瑞遺跡や聚楽遺跡がある。今回検出した土坑76は、これらに関係する遺構と考えられ、当地は遺跡の範囲に含まれていないが、古墳時代の生活空間がこの辺りにも及んでいたことを示している。

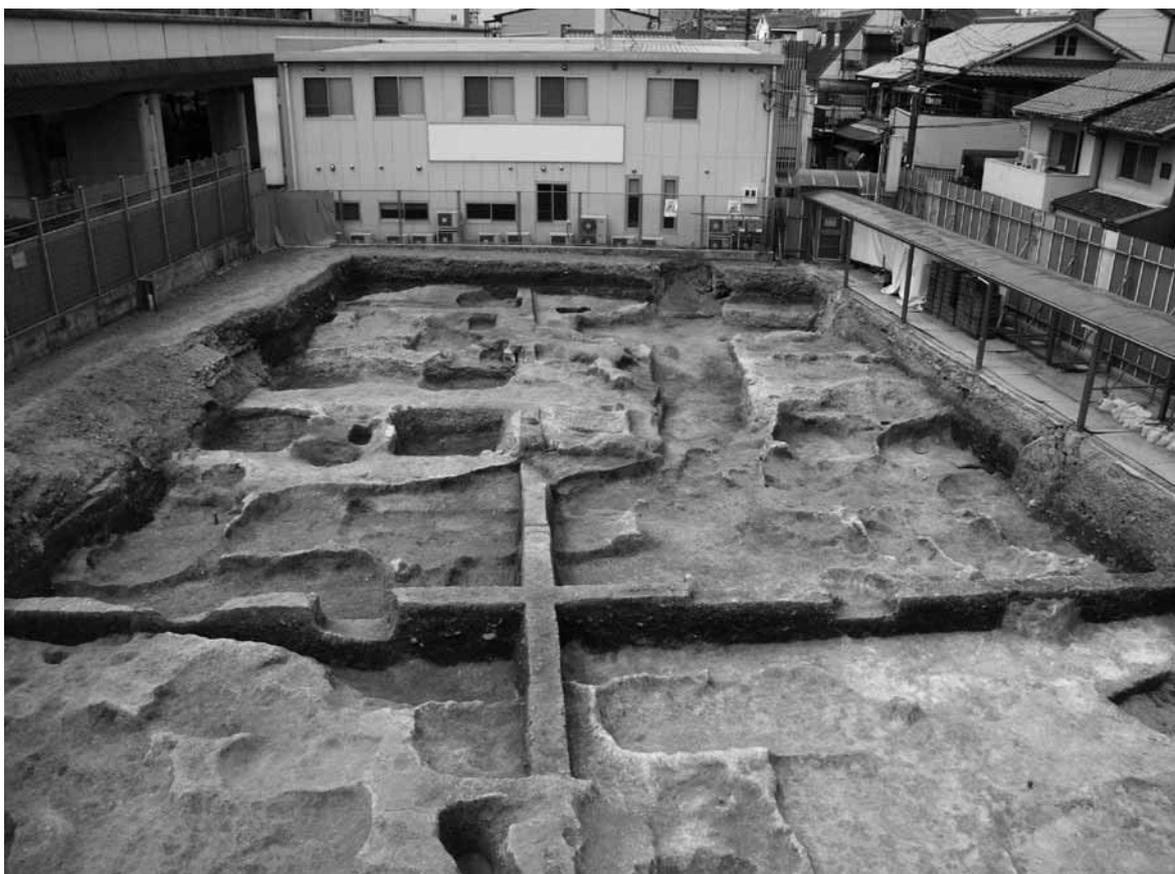
当地は、平安宮の典薬寮と御井の推定地とされているが、平安時代の遺構は柱穴1基を検出したのみであった。しかし、江戸時代前期の土取り穴から平安時代の瓦類が大量に出土しており、典薬寮や御井に関連する遺構が土取り穴によって壊された結果と考えられる。

鎌倉時代から室町時代の遺構は検出できなかったが、同様に土取り穴から土器などの遺物が一定量出土したことから、何らかの土地利用がなされていたと推定できる。

江戸時代は、前期の土取り穴を多数検出した。当地の東では、二条城造営などの大規模な開発が行われており、これらに伴う多くの用土が当地で採取された痕跡と考えられる。その後、当地一帯には京都所司代や奉行所などに関連した施設が造営されており、調査区南西部で検出した整地層はそれに伴って行われた整地と考えられる。

その後は、近代耕作土に覆われ、耕作地に変わっている。

圖 版



1 調査区全景（東から）



2 土坑76（北東から）



3 土坑76土器出土状況（南東から）





軒瓦

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきゅうてんやくりょう・みいあと							
書名	平安宮典薬寮・御井跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2014-2							
編著者名	布川豊治							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2014年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきゅうあと 平安宮跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしのきょうくるまぎからょう 西ノ京車坂町 12、19-1	26100	2	35度 01分 02秒	135度 44分 20秒	2014年3月 4日～2014 年4月24日	521㎡	病院建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安宮跡	都城跡	弥生時代 ～古墳時代	土坑	古式土師器、須恵器、石器		江戸時代前期の多数の土取り穴を検出した。それらから平安時代の瓦類が多量の出土した。		
		平安時代	柱穴	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、瓦類、石製品				
		鎌倉時代 ～室町時代		土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入磁器、瓦類				
		江戸時代	土取り穴	土師器、焼締陶器、施釉陶器、染付磁器、磁器、輸入磁器、瓦類				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014-2

平安宮典薬寮・御井跡

発行日 2014年7月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961